

戦争体験文庫第 69 回資料展示

空で征った者たち

ある海軍飛行専修予備学生の資料から



2025 年 6 月 28 日（土）～10 月 30 日（木）

4年前の8月15日毎日新聞奈良版に「戦後76年：若い命が…
たまらぬ寂寥感 特攻隊員寄せ書き、マフラー保管」という記事
が掲載されました。昭和19（1944）年12月、フィリピンから台
南に機材受領に赴いた高木昇大尉（後、澤井と改姓）が、特攻の
訓練を行っている後輩たちの技量不足を嘆いたところ、居合わせ
た大佐に指導を頼まれ、10日間これに応じます。別れ際に自分の
マフラーに寄せ書きをしてもらい、大事にしていました。それを
89年に靖国神社遊就館に寄贈したという内容でした。この時の
塩路佳子記者の斡旋で、澤井氏の子息より、アルバムと遊就館寄
贈時の澤井宛の手紙を中心とする資料を当館に寄贈いただきま
した。今回はその資料から、高木及び同期生戦死者の写真に加え、
戦後40年に思わぬ形で遺筆に出会った遺族たちの声を紹介しま
す。

第 63 回展示では、小学校卒業後、陸軍の学校へ進学し操縦士となった今谷正一を紹介しましたが、高木は名古屋薬学専門学校

(現名古屋市立大学薬学部)を卒業後、昭和17年1月に海軍飛行(科)専修予備学生となり課程を修了、操縦士となっています。

海軍飛行専修予備学生とは、大学や専門学校を卒業後、「土浦海軍航空隊ニ於テ、約三月軍事訓練ヲ受ケシメタル後、第十一連合航空隊司令官ノ定ムル専修別ニ依リ、当該海軍練習航空隊ニ入隊セシメ、約九月軍事教育ヲ受ケシム」(昭和16年海軍省令第37号10条)制度です。

他に海軍の操縦士となるコースとしては、海軍一般の正規士官養成課程である海軍兵学校を出て、飛行科を選ぶケースや、有名な「予科練」こと、海軍飛行予科練習生を経るコース等がありました。予科練は、もともとは、今谷正一の陸軍少年飛行兵と同様、高等小学校卒業程度で受験するものでしたが、昭和12年からは、海軍兵学校や高等学校と同様、中学4年修了程度で受験する甲種が新設され、従来の課程は乙種と名付けられています。





「昭和十四年夏季軍事教練ニ於ル幹部 公園資生堂」とある



「昭和十五年八月畝中会上市平宗ニ於テ 我ハグロッキー也」とある。帰省しての同窓会か



『飛魂 海軍飛行科第九・十期予備学生出身者の手記』山陽図書出版、1982、P24によれば、高木ら第9期生は、全員が在学中に飛行訓練を受けた海軍予備航空団出身者だったと言います。実際に左の写真のように、高木は卒業の段階で、一定の飛行技術を身に付けていたのがわかります。

白鷗遺族会編、発行の増補版『雲ながるる果てに』河出書房新社、1995、巻末の一覧によれば、9期生は38名で、その前の昭和16年(1941)4月入隊の8期生が45名、15年4月入隊の7期生が33名と、高学歴かつ、在学中に訓練を受けている者を採用していたため、海軍飛行専修予備学生数は必ずしも多くありません。このころ、予科練はすでに甲種・乙種それぞれ千人を超える入学者を集めていました。

しかし、戦局の悪化に伴うパイロットの損耗によって、海軍飛行専修予備学生の採用数は増え続け、昭和18年9月入隊の13期は、5,199名もの大量採用に至っており、翌19年になると、大学等に籍を置く、狭義の学徒出陣勢もこれに加わってきます。

なお、学生時代の高木の姿を中心とするこのアルバムには、昭和11年、千葉の館山湾で戦闘機と爆撃機が正面衝突し、3名が殉職したという新聞記事と関係者の写真が、高木の写真に混じって唐突に貼り

付けられています。逆算すれば、高木が中学低学年のころで、この事故が、飛行機に関心を持つきっかけ、とも考えられます。



「2601.7.16

春光散々として白砂に映え

白鳥飛び交ふ知多新舞子」

とある。2601とは紀元2601年、つまり1941年のこと

(照参画表)

充員召集令状

現住地 大 村 海軍航空隊
海軍豫備少尉 高木 大 井

右充員召集ヲ命ズ
左記ニ依リ参著ス

到着年月日時 昭和十八年一月二十日 時

到着地(處) 大 村 海軍航空隊

海軍大臣

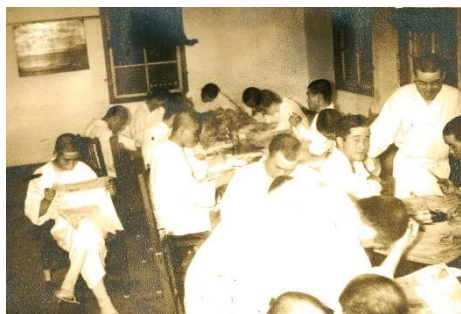
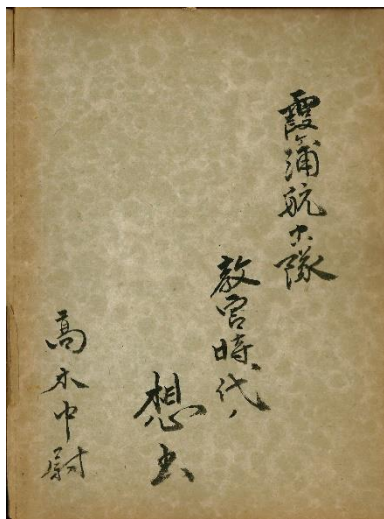
官氏名 海軍豫備
乗車(船)區間 自 縣至 縣
乗車(船)等級 一等
運賃 金貨
乗車(船)月日 昭和 年 月 日

發行處 海軍省人事局
運賃支拂處 海軍省經理局

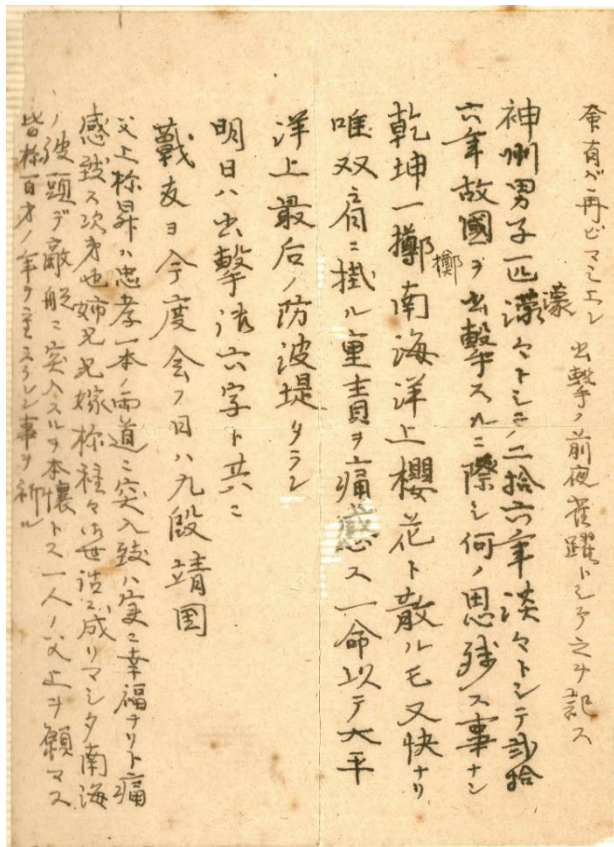


海軍兵学校を出た者は自動的に現役将校となるのとは異なり、海軍飛行専修予備学生出身の将校は、あくまでも予備役将校です。高木らは、課程を終えるとすぐに召集されており、その際の「赤紙」(召集令状)も見えています。

なお、特攻の際には、海軍首脳はなるべく海軍兵学校出の将校を避け、海軍飛行専修予備学生や予科練出身者を選びがちであったという証言もあります。



高木がまず配属されたのが、予科練等を擁する茨城の霞ヶ浦航空隊で、ここで約1年、教官任務にあたります。高木の同期生の予備学生出身者は、年齢や学歴から、まずは教官に任じられることが比較的多かったようです。表紙に掲げた写真では「決戦ノ大空ニ在ルモ、内地ノ教官ニ在ルモ、吾等ノ責務ナリ」としていますが、操縦士候補の大量採用が続いていたこの時期には、その養成が大きな課題でした。

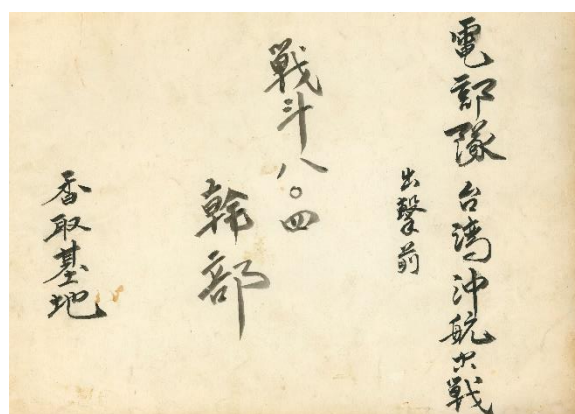


高木は昭和19年3月、千葉県の新設された香取航空基地で、夜間戦闘を行う目的で新設された戦闘804飛行隊に転じ、8月には鹿児島島の串良航空基地に進出しています。

左の「遺書」はこのころ記されたのでしょうか。吹っ切れた表現をしている一方で、「太平洋上最后ノ防波堤」という言葉には、戦局の悪化を感じ取っていることが伺えます。

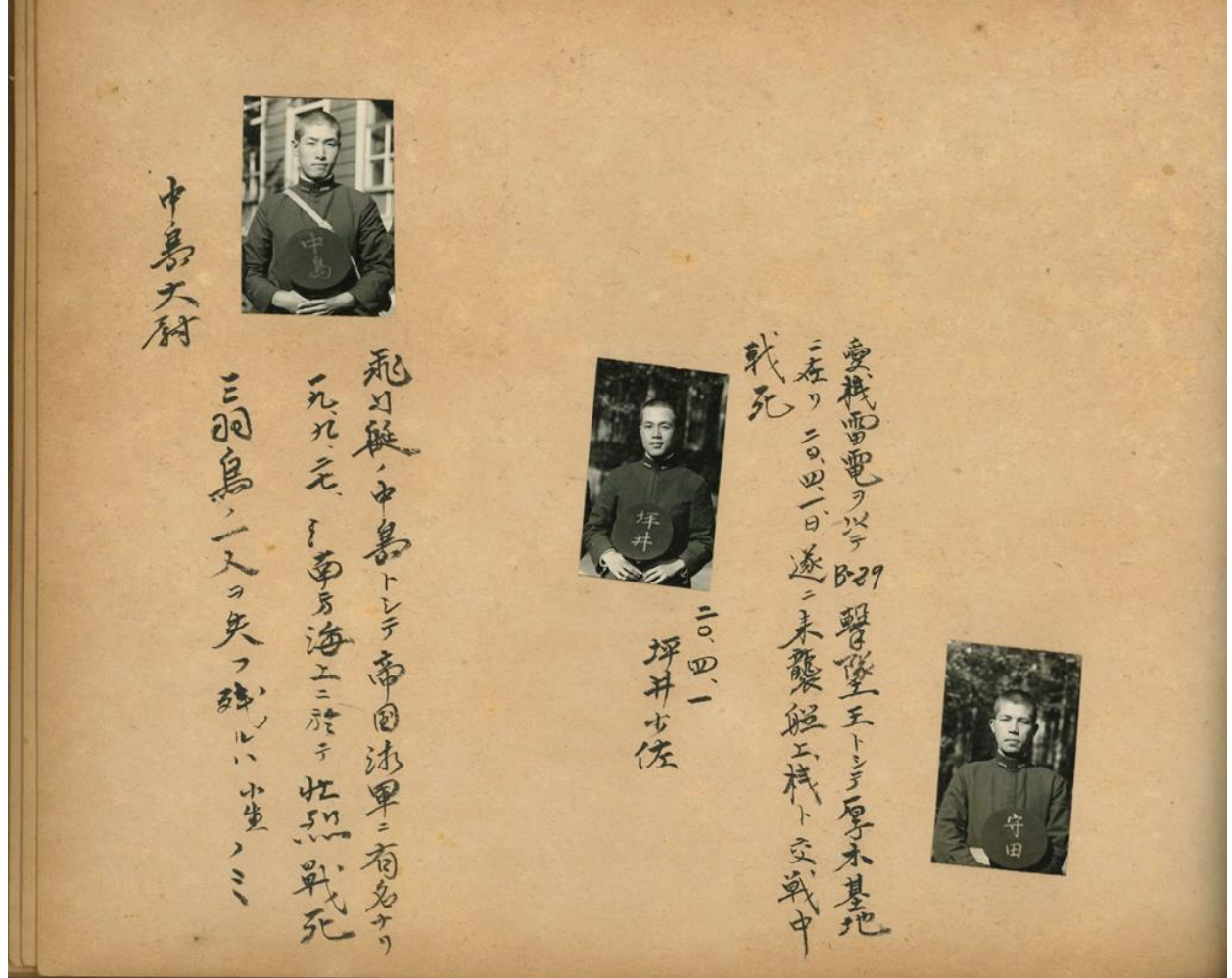
この後、高木ら戦闘804飛行隊は、19年10月の台湾沖航空戦、12月末から翌年にかけてのフィリピンでの捷一号作戦、昭和20年3月から6月にかけての沖縄戦に参加し、鹿児島島の岩川基地で終戦を迎えています。

途中、戦闘第804飛行隊は、やはり夜間戦闘用に組織された戦闘第812・912飛行隊とともに、特攻に批判的だった美濃部正少佐に率いられる、通称「芙蓉部隊」を構成しています。（この頁の飛行隊の足跡は渡辺洋二『彗星夜戦隊』図書出版社、1985による）



戦後高木(澤井)は、奈良県上市で薬局を自営しますが、戦友会には積極的に関わっていたことが、残ったアルバムや来信などから確認できます。

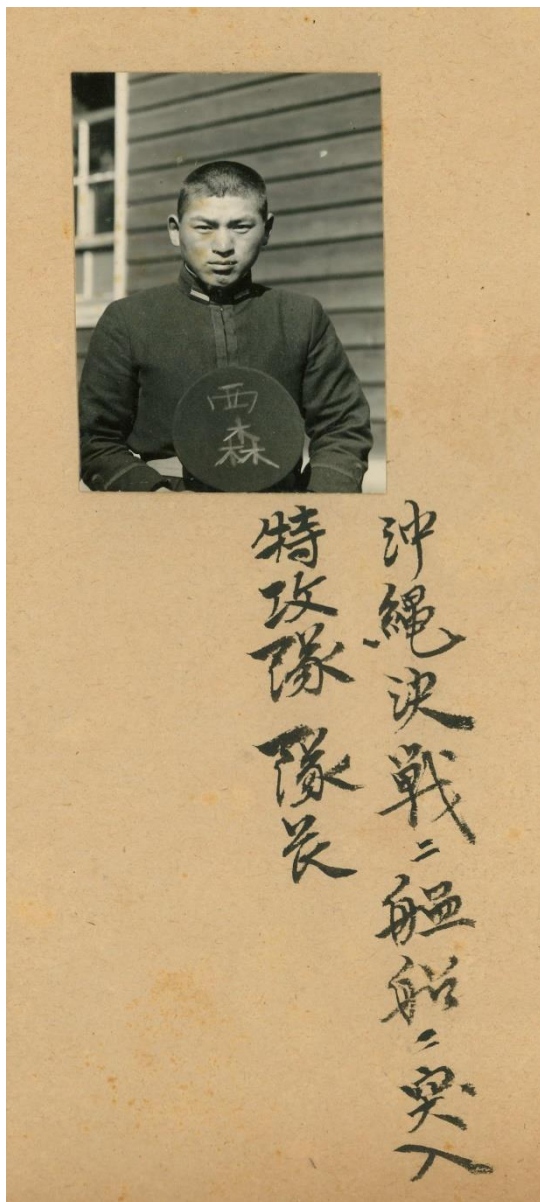




自らと中島が「三羽鳥」とすれば、もう一人の「鳥」は誰を指すのであろうか

海軍飛行専修予備学生第9期生の戦死者1（写真順）					
姓名	戦死日	戦死場所	所属部隊	出身校	出身県
山田昇一郎	昭和18.11.11	ブーゲンビル沖	空母瑞鳳	日大	(不明)
逢沢芳男	昭和18.10.18	ニューギニア	201空	西南学院	福岡
大山源七郎	昭和18.12.5	ルオット	空母瑞鳳	九大	宮城
片山伝	昭和19.1.2	ラバウル	204空	日大	香川
奥村豊	昭和19.2.23	内南洋	761空	京都高等工芸	滋賀
伊藤彦吉	昭和19.1.30	マーシャル群島	752空	青山学院	山形
加藤峻平	昭和19.4.27	ビアク基地	攻701	北大	岐阜
永田預志也	昭和19.6.17	内南洋	523空	日大	東京
渡辺武治	昭和19.7.19	テニアン島	321空	国学院	東京
鈴木博	昭和19.4.30	トラック島	戦603	京都薬専	広島
山下涌資	昭和19.5.22	父島	121空	東洋大	神奈川
山越富雄	昭和19.10.25	フィリピン東方海面	攻401	早大	東京
中原通夫	昭和19.10.14	台湾沖	攻262	室蘭高等工業	山口
中島文夫	昭和19.9.27	ルソン島マロロス付近	第4艦隊司令部	京大	東京
坪井庸三	昭和20.4.1	千葉	302空	同志社大専	岐阜
守田長兵衛	昭和19.6.15	硫黄島	戦316	京大	兵庫





前掲『雲ながるる果てに』によれば、高木の同期9期生は、38名中24名が戦死しています。

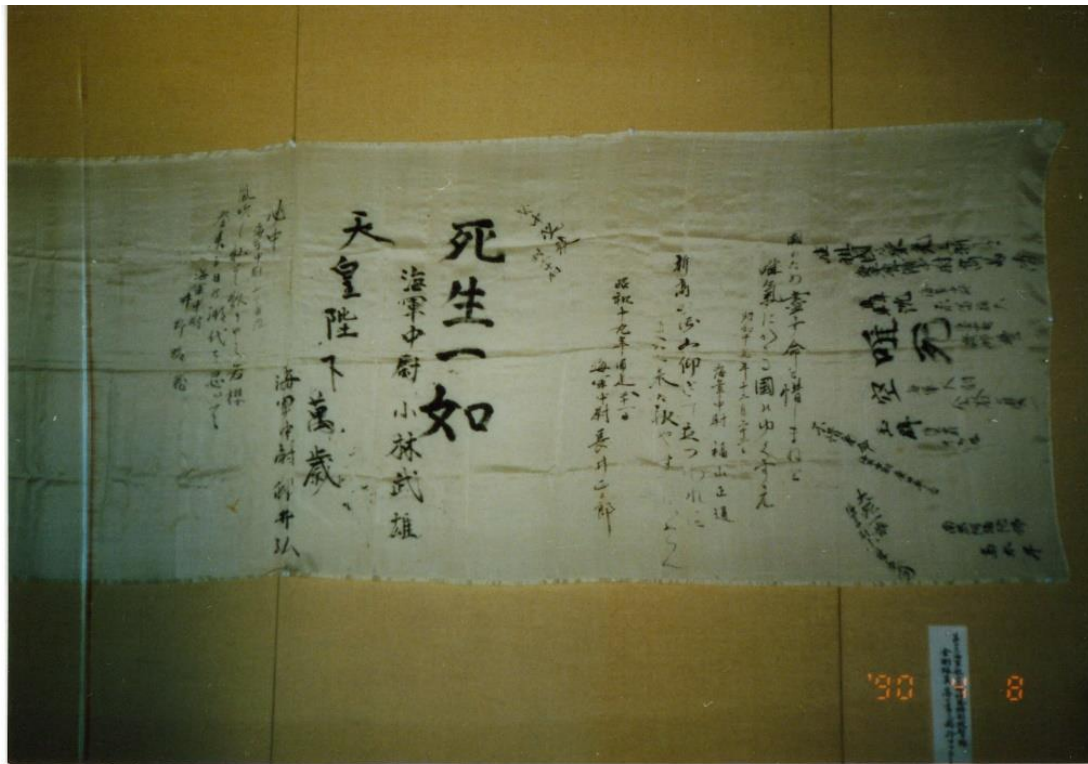
高木のアルバムから、その肖像写真がある者を、6-9頁に拾ってみました。

前掲『飛魂』から、9期生戦死者たちのプロフィールを何人か拾っていきましょう。奥村豊には戦病死した兄と、末子の弟がおり、弟によれば自分の予科練志願に反対したといひます。永田

預志也には体格が同じ兄がおり、兄はよく自分の服を「盗着」され、怒っていたが、戦死により今度は逆に弟の衣類一式を相続することになった、と嘆いています。渡辺武治は、肥前大村藩士で維新に活躍し、大阪府知事や貴族院議員を歴任した渡辺昇の孫にあたります。坪井庸三は、ハンサムなうえに、ラジオや新聞で取り上げられたせいもあり、若い女性を始め皆の人気者で、同僚はフィルムを借りに行く際にその人気に当て込んで同道を求めたとしています。日下賢城は9期生最初の殉職者で、少尉任官のたった4日前の事故だと言い、後輩が泣いて任官を訴えたが、かなわなかったと言ひます。大田原尚清は、下野大田原藩主末裔の子爵でした。

西森は高木のキャプションにある通り特攻隊員としての戦死ですが、9期生で特攻に出たのは戦死24名中西森のみです。しかし、大量採用された、13期生5,199名中戦死者1,617名、うち448名が特攻による戦死となっています。戦局の悪化の中で、速成養成され、飛行経験が浅い者が特攻に投入されていった、という傾向が伺えます。

海軍飛行専修予備学生第9期生の戦死者2（写真順）					
姓名	戦死日	戦死場所	所属部隊	出身校	出身県
大久保光暉	昭和19.3.6	横須賀海軍病院野比分院	(不明)	東京美術学校	神奈川
日下賢城	昭和18.1.6	大分湾	大分空	竜谷大	福井
中山忠治郎	昭和18.4.2	鹿児島湾	鹿児島空	東大	茨城
大田原尚清	昭和20.6.21	ラバウル基地	985空	京大	東京
大沼満	昭和20.3.18	鹿児島湾	203空	早大	秋田
渡辺友好	昭和20.7.13	美保航空基地	攻105	日大	福島
増田宏夫	昭和20.1.29	新竹付近	901空	京大	大阪
西森秀夫	昭和20.4.27	ルソン島マロロス付近	第4艦隊司令部	京大	東京
増田宏夫	昭和20.1.29	新竹付近	901空	京大	大阪
典拠 白鷗遺族会『雲ながるるはてに』河出書房新社、1995					



澤井(旧姓高木)昇が靖国神社遊就館に寄贈したマフラー

昭和20年1月3日から9日までにフィリピン各地から特攻出撃したマフラー寄せ書きの金剛隊員					
姓名	戦死日	※	寄せ書き	出身※※	出身県
金谷真一	昭和20.1.5	18	空	海兵71期	東京
福山正通	昭和20.1.6	19	国のため尽くす命を惜しまねど唯気にかかる国のゆくすえ	海兵72期	奈良
井野精蔵	昭和20.1.3	30	嵐吹く秋ぞ散りゆく若桜春来る日の御代を思ひて	13期（法大）	愛知
磯部豊	昭和20.1.6	19	唯死	13期（鳥取高等農業）	愛知
小林武雄	昭和20.1.6	30	死生一如	13期中大	千葉
小林秀雄	昭和20.1.6	30	大死一番	13期中大	東京
高島清	昭和20.1.3	30	唯祖国の栄光を祈りつつ	13期（広島高等工業）	広島
富沢幸光	昭和20.1.6	19	北の熊今日ぞ忠死の撲り込み	13期（北海道第2師範）	北海道
長井正二郎	昭和20.1.5	18	新高の御山仰ぎて立つわれにまた来ぬ秋やすでにいぬらん	13期（東京第1師範）	東京
永富雅夫	昭和20.1.6	19	轟沈	13期（関西学院）	大分
村上惇	昭和20.1.9	25	必中必殺	13期（明大）	東京
山下省治	昭和20.1.6	19	必中	13期（西南学院）	福岡
廣田豊吉	昭和20.1.6	22	不惜身命	13期（和歌山師範）	和歌山
邑井弘	（生還）	30	天皇陛下万歳	13期（不明）	
典拠 特別攻撃隊戦没者慰霊顕彰会『特別攻撃隊全史』2020及び大町力『風立てば』1988					

※金剛隊の隊番号で18は第十八金剛隊所属を指す

※※単に13期としているのは高木と同じ海軍飛行専修予備学生出身者を指し()内は出身校

拜啓

本日大町力様より貴殿のマフラーに特攻隊員が
寄せて書きこまれた早夏と、その経緯を記された封書を
頂きまゐりました。丁度土曜で家に居り、じっくり読ませて頂き
感入りのものがありました。
母は本年一月、九〇才にて代界致しました。兄が昭和20年に
戦死致しましてから、未だ一度も戦死推定地に見舞に
行つて居らず、次兄(海兵隊期)も、扶桑乗組にて
昭和19年10月25日レイテ湾海戦で死して、
昭和19年10月25日レイテ湾海戦で死して、
ありまふこともあり、色々な条件の整つた昨年末、ルバン島
レイテ湾の近くまで詣つておすべつ予約も済ませてあり
ましたが、三井物産の事件が発生、治安悪化で、園園より
反対され、果てずいになつておりました。
二期靖国神社の多ス会には一度参り、偶々猪口大佐も
みえられ、御挨拶も致しました。

父が未だ生存致してありました日本の敗色厚い昭和20年
春が初夏の頃、父が猪口大佐に呼ばれて東京にて
兄のソソグビン様の様子などを伺い、父の口を聞いて模様を
私も伺つておりました。おなたからか、神代特別攻撃隊という
本に最後の攻撃の早夏の戦つてゐることを教へて頂き、半元は
持て、子供達(現在社会人二年、大学一年、高二的男三人)に
語り継いであります。彼等には、単なる、恰好い……に早夏に
過ぎないようですが、幸甚としやまむで、お月様には、悲壯感と、
矢張り立派な、だんだんおとなしく戦争中のあり様が、あつた、
とりわけ、あのマフラーの、お父様を見まわしたとき、あの日頃傑作な
ことばかり云つていた、お父様も、酒20何オカのお父様が、あつた、
境地のような言葉を書きこまれてあります。ハツと教えました。
また、兄の最後の発進地はクラークフィールドと聞いておりましたが、
マバウカットの由です。今度北島を訪ねるときは行つてみよう
と思ひます。

金谷真一の弟からの礼状

謹啓

昨日宛然の事、大町力様よりの
好意に接し、此の度の京都での会合の
際にもお知れ頂戴。又マフラーの遺書
を早夏に……頂戴致し……
戦後すべからずと思ひます。東京の……
本願寺で……慰霊祭に……母の……
……に生きて……という……胸に上京
して兄の消息を知る生か者を……

また、特によつたりした消息を……
方には……母にも……
……早夏に……兄の……
……建立して……兄の……
……何故か……
……参拝させて……
……お父様は
……お父様は……
……お父様は……

高島清の弟よりの礼状

